

強者の戦略

【第10回】文法とテキストとの連関（上本）

前書き

今回は英文和訳問題の中に見られる文法と内容面との連関をテーマにしています。以前、次の文を見て甚く感銘したことがあります。"Grammar should not be taught in a vacuum. It should be taught as part of the reading and writing curriculum. (文法は文法だけで教えられるべきではない。リーディングやライティングの一環として教えられるべきなのだ)"まさしく、この理念を具体化した1題になっていると思います（vacuumとcurriculumが、完全にはないにしても、脚韻に近い語選択になっているところも趣深いところです）。さて、今回の問題の再確認です。以下の通りでした。

【問い】 次の英文の下線部を和訳しなさい

An individual person is unique and valuable. This value we place on the individual finds expression in a cluster of ideas and attitudes. **People should be treated as ends in themselves, and never merely as means. One person's loss is not necessarily justified by someone else's gain. People have rights. And, linked to these ideas (psychologically if not logically) is the pleasure we take in human variety, and a preference for a society in which individuality flourishes.**

続いて解答例です。

個人はそれぞれ独特であり価値がある。その個人に置いているこの価値は一連の考え方や気持ちの持ち方に現れている。人は本来目的として扱われるべきであり、決して単なる手段として扱われるべきではない。ある人の損が必ずしも他の人の得によって正当化されるわけではない。人は権利を持つ。そしてこれらの考え方と、私たちが人間の多様性を楽しんでいることや、個性が開花する社会を好んでいることは、論理的にとまではないかないまでも心理的に、結びついているのである。

差し当たっては**構造把握の重要性**が目につきます（特に And, linked 以下ね）。また、語彙文法面でも多義語が含まれていたり、関係詞付近が訳しにくかったりしています。これらのポイント以外にも、この素材からの広がりとして説明することができるものもありますので、そういう点も解説部分で触れていきましょう。以下の順としたいと思います。

- 1 endsとmeans
- 2 in themselves
- 3 not necessarilyと部分否定のバリエーション
- 4 linked to these ideas is ～の構造把握
- 5 A if not B
- 6 the pleasure we take in human varietyの訳し方

強者の戦略

1 endsとmeans

end も means も **多義語** と呼ばれる語になります。まずそれぞれの意味を確認しておきますね。

end : ① [名] 終わり
② [名] 限界
③ [名] 目的
④ [名] (細長いものの) 端 ; (広がりを持つものの) 末端部 ; (中心から外れた) 周辺地域 ; 辺境

means : ① [名] 手段
② [名] 資産 ; 財産

mean : ③ [形] 劣った ; 卑しい

mean : ④ [動] ~を意図する、~するつもりだ ; ~を意味する

end(s)は元来「**末端 ; 末端部**」という意味を持っていました。ちょうど「**終わり**」というイメージから訳語の広がりには想像が付きまますね。しかし mean(s)に関しては、訳語から言えば随分と各訳語間で大きな隔たりがあるような印象があります。

mean(s)は元はといえば middle や medium などと同系の「**中間**」という意味を持っていました。① [名]の「手段」という訳語は**目的に達するまでの「媒体**」としての訳になります。② [名]の「資産 ; 財産」は**生きるための手段**です。③ [形]の用法に関しては、本来「**中くらい ; 並の**」という概念が「**ありふれた ; 劣っている**」につながった経緯があります。同様の経緯を持つ語では common/commonplace が典型的な例ではないでしょうか。「**良いもの**」に触れる機会が多くなるにつれて、「**並のもの**」は「**ありふれたもの ; つまらないもの**」へと移行していきます。一方で、④ [動]の用法については少し経緯が異なります。こちらは mind と同系の語になりますから、系統としては「**思う ; 意見を持つ**」ことに起源を持ちます。

この文章では「**個人はそれぞれ独特であり価値がある**」という内容で展開していますから、ends は「**目的**」 means は「**手段**」と訳すことにします。「**その人のために事が為されないといけないのであり、その人を手先に使って事を為してはならない**」という、意義深い箴言になっています。

強者の戦略

2 in themselves

再帰代名詞 (oneself) を用いた慣用表現です。in oneself で「それ自体で；元来は」といった訳し方をします。ただ実際の用例としては、in itself と in themselves でしか使われることはないので、この慣用表現はそのどちらかの形で見かけることとなります。

前置詞 + oneself のバリエーションは他にもあります。広がりとして表現と用例を以下にまとめておきますね。

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1. be beside oneself with A | : A に我を忘れる |
| 2. between ourselves | : ここだけの話だが |
| 3. by oneself | : (他に誰もいなく) 一人で；独力で [≒ alone] |
| 4. for oneself | : (自分のために) 一人で；独力で |
| 5. in itself [themselves] | : それ自体で；元来 |
| 6. in spite of oneself | : 思わず |
| 7. to oneself | : ①自分だけのために ②心の中で；秘密に |

【例文】

1-1 He **was beside himself with rage** when I told him what I had done.

「私がしたことを彼に告げると彼は怒りで我を忘れた。」

2-1 Let's settle the matter **between ourselves**.

「ここだけの話でその問題を解決しよう。」

3-1 You shouldn't decide such a serious matter **by yourself**.

「こういう重大なことは君の一存で決めてはいけない。」

4-1 I won't tell you the answer. Look into it **for yourself**.

「答えを言いませんから、自分で調べなさい。」

5-1 For him gold was an end **in itself**.

「彼にとって金それ自体が目的だった。」

5-2 Money, **in itself**, is not bad.

「本来、金は悪いものではない。」

6-1 I burst out laughing **in spite of myself**.

「思わず吹き出してしまった。」

7-1 I have this big room all **to myself**.

「私はこの大きい部屋を独占している。」

7-2 I'll keep the secret **to myself** until death.

「死ぬまでその秘密はもらさないぞ。」

この他にも of oneself 「独りでに」という表現も参考書などでは見かけられますが、実際の英語ではほとんど用いられず、現代では代わりに by oneself で表現される方が一般的です。

強者の戦略

3 not necessarilyと部分否定のバリエーション

not～necessarilyは**部分否定**の表現ですね。今回の文章中でもおそらくご自身の答案に反映できているポイントだと思います。ここでは部分否定のバリエーションとして、not～necessarily以外の表現を紹介しておきますね。

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1. not ~ absolutely | : 完全に～というわけではない |
| 2. not ~ altogether | : 完全に～というわけではない |
| 3. not ~ completely | : 完全に～というわけではない |
| 4. not ~ entirely | : 全部～というわけではない |
| 5. not ~ exactly | : 完全に～というわけではない |
| 6. not ~ everything | : 全てのもの～というわけではない |
| 7. not ~ fully | : 完全に～というわけではない |
| 8. not ~ quite | : 完全に～というわけではない |
| 9. not ~ wholly | : 全部～というわけではない |

【例文】

- 1-1 He will probably agree with us, but I'm **not absolutely** sure.
「彼はおそらく私たちに賛同してくれるだろうが、絶対に確信があるというわけでもない。」
- 2-1 I am **not altogether** of your opinion on this matter.
「この件に関しては完全にあなたに同意するというわけではない。」
- 3-1 It's my first week here so I'm **not completely** au fait with the system.
「ここに来てまだ1週目なので完全に組織に精通しているわけではない。」
- 4-1 Their explanation was **not entirely** satisfactory.
「彼らの説明は必ずしも完全に納得のゆくものではなかった。」
- 5-1 He didn't **exactly** love her but he married her.
「彼は必ずしも彼女のことを愛していたわけではなかったが、彼女と結婚した。」
- 5-2 It's **not exactly** beautiful, is it?
「それが美しいかというところ少し違うよね。」
- 6-1 Don't be gullible! You must **not believe everything** you hear.
「だまされてはいけません。聞いたこと全てを信じてはなりませんよ。」
- 7-1 The potential of the electronic medium for dictionaries has **not yet been fully** exploited.
「電子辞書の可能性はまだ完全には開発されていない。」
- 8-1 He left his opera **not quite** finished at his death and it was revised and partly scored by his friend.
「彼はオペラ作品を完全には仕上げないままこの世を去ったので、彼の友人が手直しし、ところどころ曲を足すことになった。」
- 9-1 He is **not wholly** to blame for the accident.
「その事故に関しては全面的に彼が悪いというわけではない。」

上記の例の中に 5. not～exactly「完全に～というわけではない」という表現を載

強者の戦略

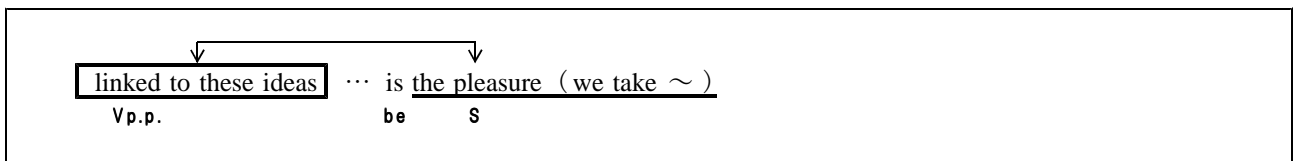
せています。どうでしょう？ この表現が部分否定であるとはと習ったものの、実際に訳してみるとうまくいかず、困った経験をした人も少なくないのではないのでしょうか？ not ~ exactly の部分否定について少し説明しますね。

5-1 の例文を見てください。この例文内で not ~ exactly が表しているのは、「"love" という言葉でぴったり表されるわけではない ("love" とは少し違う)」となる部分否定です。訳しにくい所以がここにあるわけですね。部分といてもある集合における一部分を指すのではなくて、「その言葉ではぴったり表されない」=「完全一致ではない」ことを表しているわけです。同様に、5-2 の例文でも、「厳密に言えば『美しい』わけではないよね」という意味から「それが美しいかという少し違うよね。」という訳になります。「"beautiful" という言葉でぴったり表されるわけではない」というのが not ~ exactly の持ち味です。

4 linked to these ideas is ~ の構造把握

ここが構造把握の点で最も重要な点になります。今回テーマとしている「**文法とテキストとの連関**」が問題になる箇所です。

文構造の説明から入ると、最優先事項に「**倒置構文を見抜く!**」ということになります。以下の通りです。



これは【X is Y ⇔ Y is X】のように be 動詞の前後を入れ替える倒置構文になります。従って、もとの文は the pleasure (we take ~) is linked to the ideas. となります。we take からのまとまりは関係代名詞節になり、主語である pleasure にかかりますから、「S はこれらの考え方に関連している」と訳すこととなります (S の部分の詳細な訳し方は後ほど、6 の部分で解説しましょう)。倒置構文をもとの語順に戻して考えた結果、**A is linked to B (AはBに関連している)** の受動態であったことが判明します。

be 動詞は linking verb (連辞) と呼ばれることもあり、その働きは前後を繋ぐこととなります。ざっくり言えば "=" (イコール) "に相当する、こととなります。【X=Y ⇔ Y=X】ということになり、この be 動詞前後の "=" 関係から倒置が起こるわけです。

では受動態だったとしても Vp.p. ~ is S の倒置が起こるのか、というとそうではありません。そこで気になるのが……、**どんな時に倒置が起こるのか**、ですよね。

ここで**倒置が起こっている要因**に、"these ideas (これらの考え方)"があります。「これら」が指す内容は、この文の前に出ている3つの並列事項ですね (a cluster of ideas and attitudes → ①人は目的として扱われるべきだ②ある人の損が他人の得によって正当化されてはならない③人は権利を持つ → these ideas)。強調して言いますね。「これら」が指す内容は、この文の前に出ている3つの並列事項です。 前回の強者への道 (第8回) を読んでいる人はピンと来たのではないのでしょうか？ 前回の最大のポイントで、**文頭旧情報・文末新情報の配置**という考え方がありました。今回、過去分詞のまとまりが前方移動してる原因は、these ideas を前文に近づけるためであり、旧情

強者の戦略

報を含むからこそ【X is Y ⇔ Y is X】の倒置が起こっているのだと分かります。

※「the pleasure は旧情報ではないのですか」という質問には、「the にはいくつかの用法があって、旧情報の the はその一つ。この the は限定の the という別用法になります。」とお答えしますね。限定の the とは、主に of 句や関係代名詞節がかかる名詞には原則的に the をつける、というものになります。実際、ここまでの文脈内で「喜び」に関する内容は出てきていませんね。前出の「喜び」を受けての「その喜び (the pleasure)」ではない、ということです。冠詞 the については、いつか冠詞のお話をする機会があれば、その時に詳しく触れることにしましょう。

他にもいくらかこの種の倒置の類例を挙げておきましょう。面白い素材を知っていますよ。旧大阪外大の問題からの抜粋ですが、言葉が人の心を傷つけることについて、いくつか例を挙げながら説明している英文の一節になります。

EXAMPLE (2): *Don't you care about your children?*

This sentence looks like a question, but in fact it does not ask you anything but it blames you sharply. **Underlying this sentence is "You don't care about your children. You should care about your children; it's wrong of you not to. Therefore, you should feel rotten."** Doesn't this hurt you so ?

もとは S is underlying this sentence. (underlie は他動詞で「S は O の根底にある」の形で使います) であったところから、**underlying this sentence** is S. という形になっています (S は引用文全体)。現在進行形に由来するの現在分詞のまとまりが前方移動しているということになります。linked to these ideas の文との共通点が見られますね。旧情報を含む分詞のまとまりが前方移動しています。情報展開の観点から倒置の原因が説明できます。

さらにもう一つ、同大学同問からの続きの一節です。

Even a small word can arm a sentence. Examine the next example paying special attention to the word "even."

EXAMPLE (3): *Even an elderly person should be able to understand this rule.* **Behind this sentence hides the following meaning:** "There's something wrong with being an elderly person. It doesn't take much intelligence or ability to understand this rule. You should feel guilty and stupid." How awful !!

Behind this sentence hides the following meaning. に Behind 旧情報 hides S. という構造が見られます。the following meaning (次のような意味) もコロン以下に続く内容を受けますから、後文とのつながりを考えて後方移動されています。非常に情報展開がスムーズで、流れの良い英文になっています。

「倒置」は確かに文法項目の一つとして扱いますが、やはりテキストとの連関(今

強者の戦略

回ならば情報展開) という十分な理由があって倒置されているのです。だから、文脈 (context) の中であってはじめて本当の意味で倒置構文の使い方を学習することができることとなります。"Grammar should not be taught in a vacuum."という言葉が心に染みる素材だと思います。

5 A if not B

A if not B は「B ではないにしても A」という意味で、接続詞 if は譲歩を表します。この表現では A の後により程度の大きい B を並べて使います【A < B】。また、A と B には文法的に対等な品詞を用います。例文を見ましょう。

例 1) Such measures are desirable, **if not** essential.

(そのような措置は必要不可欠ではないにしても望ましい)

例 2) He has spent most, **if not** all, of the money.

(彼は全てではないにしてもほとんどお金を使ってしまった)

例文のように、「B と言っては言い過ぎだが A なら差し支えない」という意味を持ちます。

今回も "psychologically if not logically" で、「logically にと言っては言い過ぎだが、psychologically に」で意味を取ることになります。「the pleasure が these ideas と【感情で < 論理で】結びついている」つまり「論理的に結びついている [説明できる] 段階とまではないにしても、感情面での関連性なら見られる」という関係になります。実際、pleasure (喜び・楽しみ) も preference (嗜好性) も、論理と言うよりは感情に関するものなので、そちらとの関連性を述べている内容であると確認できますね。(psychologically と logically で、音のお洒落も見受けられますね。和訳例も「シンリ的に」と「ロンリ的に」で揃えてみました^^)

6 the pleasure we take in human variety の訳し方

この箇所では関係代名詞省略が見られます。構造は以下の通りです。

linked to these ideas is the pleasure (**which** we take pleasure in human variety)
take pleasure in A : A を楽しむ

ここで注意しないといけないのが、take pleasure in A で「A を楽しむ」という意味の連語であること。この連語の中の pleasure が関係代名詞 which になって前方移動しています。

このように連語の一部が関係代名詞になっている場合があります。今回の the pleasure we take in A を例にとって訳し方を考えて見ましょう。次の 2 通りがあります。

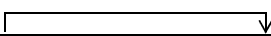
- (1) A において私たちが受け取っている楽しみ
- (2) 私たちが A を楽しんでいること

強者の戦略

どちらに関しても「私たちが A を楽しんでいる」という構造になります。

連語の一部を先行詞に取る構文では、①先行詞を関係詞節内に戻して連語を作り直し、②まとまりの最後に「こと」をつける訳し方ができます。訳しにくいときの一つの対処法として知っておくと便利です。

《連語の一部を先行詞にする構文》

先行詞を  戻して ⊕ 「こと」でくる
linked to these ideas is **the pleasure (we take pleasure in human variety)**

※ the pleasure 以下を大きな名詞のまとまりと捉えて

「私たちが人間の多様性を楽しんでいること」と訳す

後書き

今回は、前回紹介した情報構造という観点も交えて展開しました。文法は文法それ自体で学習するのではなく、テキストとの連関も考慮した上で学習すべきなんです。使われている文法項目にはその使用の裏側に広がる背景があり、その背景を学習してはじめて本当に習得したことになるんですね。英語の奥深さと趣深さ、あるいはもっと一般化すれば「言葉」の偉大さを感じる 1 題でした。

良い素材から受ける刺激、深まる理解、そして英語への興味。これからもお伝えできることを配信していきたいと思います。それではまた次回、お会いしましょう。